

して受ける罰の厳しさの表現程度により兩群のその内容発達程度  
の差を明らかにする。

(1) ※は5%レベルで有意な差が認められるもの

| 〔結果〕  |     | A群(両親健在の園児) |      | B群(両親のいない幼児) |  | 標準 |
|-------|-----|-------------|------|--------------|--|----|
| (1) ※ | E   | 七・〇%        | 三・〇% | 約七〇%         |  |    |
|       | I   | 二・五%        | 〇・七% | 約三〇%         |  |    |
| ※     | E+I | 九・六%        | 三・七% | 約九〇%         |  |    |

(2) 罪とその罰せられ方を明らかに表現した人数と全体との割合は2  
図 総反応数と全体との関係は3図の通りである。

(2) 図)  $X^2=10.180$   $P<0.01$

|     |    | 反応 |    | 無反応 |  | 計 |
|-----|----|----|----|-----|--|---|
| A 群 | 一九 | 三  | 二二 |     |  |   |
| B 群 | 九  | 一三 | 二二 |     |  |   |

(3) 図)

|       |    | 総人数 |    | A 群 | B 群 |
|-------|----|-----|----|-----|-----|
| 反応総度数 | 二九 | 二二  | 二二 |     |     |

(2) 図) の反応の反応例を挙げるとA、B群共に悪いこと。横着し  
て縛られた、牢屋に入れられたが多い。しかしこれらの内容まで立  
ち入った反応は少ない(兩群共に)。他の図版についての反応例は横  
着したから先生に叱られた、暑いからいやだといったらお母さんに  
叱られたなどである。

## 幼児の家庭生活に おける課題

大阪基督教短期大学

土山 忠 子

### 一、家庭生活の基盤

家庭の教育は、家庭生活という毎日の活動し続けている生活それ  
自体の場の中に、意図の有無に拘らず行為として生き働いていくも  
のであることを覚えなければならぬ。故に、今日の日本の家庭生  
活の中に確固たる一つの精神的基盤を持たなければ、その教育は砂  
上の楼閣にすぎないのである。人格の形成せられる場、道徳的訓練  
のおこなわれる場は家庭であり、その家庭は、神への信仰によって  
精神的に基礎づけられる時に、児童観、人間観、家庭観を生み出だ  
し、健全な家庭生活が運営されるのである。

### 二、日本の家庭生活の問題点

(一) 家長中心の旧い家の崩壊から、新しい家庭建設の不十分性——  
新しい家庭建設は、自由と民主主義を標榜したが、キリストへの信  
仰によって基礎づけられない自由と民主主義は、いたずらな放任、  
わがままとなり、家庭自体が精神的に中途半端な放浪状態を現出せ  
ざるを得なくなつた。中心を持たない家庭には、教育の前提となるべ  
き人間観が存在せず、子どもたちをいかなる人間として成長させる  
べきかの問は、不明瞭な、一貫性のない時代主義的なものとならざ  
るを得ないのでなかろうか。

(二) 家庭の宗教生活の混乱——日本の家庭は、信教の自由という美名  
のもとに、宗教生活は無宗教に近いこと、神観が不明であること、  
これらは、罪と悪に対する觀念の崩壊であり、現代の精神的道徳的  
混乱を招来していると考えられる。絶対者なる神との関係におい  
て、明確な神観の教育があつてこそ、時代の変動に左右されない人  
間観を生じ、真実の人間となることが出来る。家庭の教育的意義を  
認め、人生における不抜の根柢とするならば、これこそ今日の幼児  
教育における家庭生活上の一大課題であると考えるのである。